

期待される公共施設「図書館」と創造的拠点性に関する研究

経営学部 経営学科 梅村ゼミ
B4R11120 竹花 祐亮

【卒業論文概要】

日本は急速に人口構造の変化が進んでおり、様々な課題を抱えている。財政状況の悪化が著しく、自治体ではまちそのものの持続可能性に警鐘が鳴らされており、将来を見据えた議論、対策が活発化している。そうした中、公共施設の維持管理や老朽化対策は1つの焦点となっている。施設の再編と同時に、多様化するライフスタイルやニーズに合わせ、従来とは違う公共施設のあり方を求められる中で、今図書館でも新たなあり方が創りだされている。

本論文の目的は、求められている図書館とはどういうものなのか、くわえて図書館の「創造的拠点」として秘めている可能性を示すことである。

まず、先行研究や各資料を用いて、公共施設と図書館の現状から公共施設再編の動きを確認した。図書館を含む公共施設の老朽化は全国的に見られ、財政難の状況下で対策に迫られている。そのような中から官民連携や施設の多機能化の動きが活発化し、図書館にもその兆候が表れ、各地で個性豊かな図書館が生まれているのである。

つぎに、注目を集める公立図書館を事例として取り上げ、各資料や取材から得た情報を基に比較分析を行い、評価した。その結果から、何故注目を集め、多くの利用者を生み出しているのか。その要因をいくつか挙げる事ができた。

第一に、図書館もしくはそれを含めた複合施設をまちづくりの一環として建設し、地域活性化につなげていること。そしてそれは、まちの中核となる施設になりうるということ。

第二に、施設の「空間」や「雰囲気」を強く意識し、利用者の居場所づくりに力を入れているということ。

第三に、イベントの実施に見られる図書館の能動的な知的支援活動の実施。かつ、それら支援活動を可能にする職員の存在を重要視し、職員育成に力を入れているということ。

最後に、各図書館が各地域の環境、ニーズに合わせてマネジメントを行っていることである。これは、この先の環境変化にも長く対応しうることが期待される。

これらすべてから、図書館は従来のようなその基幹サービスのみを行う機関ではなくなっている。新たな図書館とは、様々な利用目的を持って図書館を訪れる個人が、図書館で求めたものだけではない「ひと・もの・こと」に出会う可能性を持ち、その出会いから「創造」が起きる拠点、すなわち「創造拠点」として考えることができる。そうして創造される新たな「ひと・もの・こと」は、図書館から地域に発信、拡散される。「創造的拠点性」をもった図書館は、散らばっていた「ひと・もの・こと」を1箇所に集めることで新たな力を創造し、多面的な地域活性化へとつなげる可能性を秘めているのである。

しかし、事例に取り上げた図書館は開館からの年数が浅く、「創造的拠点」として目に見えるような結果が出ていない。調査した図書館の数も不十分さは否めず、今後更に長期的な期間で調査を行う必要がある。

さらに前提として、公共施設再編の中で後回しや削減対象となる傾向にある図書館をどのように振興し、守っていくのか。また、様々なサービスを提供し利便性を高めていく中で、図書館本来の役割が蔑ろにされてしまう危険もあると感じた。

本論文では、こうした視点で更なる調査を行う必要があるとして、課題が残った。